



「龍梅伝説」



今から5、600年も昔、いくつかの村々を治める者達が見晴らしのよい小山のてっぺんに、館（やかた）とでも呼んだ方がふさわしいような山城を構え、小さな領地の農民達を支配していた。国吉近辺では、笹八口（ささやち）に殿様山、五十辺（いからべ）城、勝木原（のでわら）の古屋敷、山川の掃部（かもん）屋敷、石堤・柴野の城ヶ平（じょうがひら、あるいは盗人王【ぬすっとおう】）なんぞに、それぞれ土豪（どごう）が領主として住んでいたと伝えるが、どうもはっきりしない。さて、少し離れた赤丸城には中山国松という名の領主が居ったという。

五十辺の谷を入ったところにとてつもなくでかい一匹の雄龍が住んでいた。今も堤の跡をわずかにのこす白山池の水の底が、その龍のすみかだった。すぐそばに鍾乳洞（しょうにゅうどう）がある。さして大きな洞穴（どうけつ）でもないが、ズーッと山の向こう側、手洗野へ通じるといわれ、そこはかつて龍が行き来した穴だと信じられている。その昔、小矢部川は手洗野の村のまん前を、ノンノンと流れておったそうな。川が村の手前で大きくゆっくりと渦（うず）巻いているあたりはものすごい深淵（しんえん）で、そこに住んでいた長さ20丈（60m）の雌龍は、白山池の雄龍の妻であった。

ある日、中山国松は赤丸の城からぬけ出して、馬にまたがり、一人で狩りに出かけた。五十辺の山中に分け入り、獲物（えもの）を探しているうちに、突然大きな丸太ほどもある胴体の大蛇にでくわした。腕に覚えのある国松は剛弓（ごうきゅう）片手に矢をつがえ、弓を満月のように引きしぼると、真赤に血走る大蛇の眼にねらいを定めて、ハッシと鋭い（するどい）矢を射放った。

それからほどなく、国松はちょっとした病気がもとでいともあえなく死んでしまった。実は、射殺されたのは、大蛇に姿を変えて山の辺を遊行していた雄龍だったのであり、夫の死を知って、嘆き（なげき）悲しんだ雌龍が、恨み（うらみ）をこめて国松を呪い殺したのであった。

ところでその頃、手洗野の信光寺には梅山和尚（ばいざんおしょう）があり、村人の信仰を一身に集めていた。

夜まだ明けきらぬ霧の中から、フト現れた一人の女。とっくに起きだした梅山のあげるお経を、庵（いおり）のそばで立ったまま、頭をたれてジッと聞きいつている。そんなことが幾朝（いくあさ）も続いたある日、梅山和尚は女にたずねた。

「そなた、この間からというもの、一日として休むことなく熱心にお寺へ

やって来なざるが、何か訳（わけ）でもおありかな。」

女はしばらく黙って（だまって）いたが、

「実を申せば、私は人間の身ではございませぬ。小矢部の淵（ふち）に住む龍なのです。先頃私の夫が、人を害したでもないのに射殺されてしまいました。あまりにむごい仕打ちに対し、私はやむにやまれずその仇（かたき）を討ったのでございます。今はもう夫のもとへ参りたい一心ではありますが、罪を犯したこの身ゆえ、何とか和尚様にお救いいただけぬかと願い、通って来るのでございます。」

涙で語る龍女を憐れみ（あわれみ）、梅山は答えた。

「仏門に入りたければ、後日、自身を現わしてやって来なされ。」

約束の日は、朝から物凄い暴風雨であられが地面を叩きつけていた。見ると、禅堂（ぜんどう）の屋根に巨大な龍が巻きついているのではないか。見るも恐ろしいその姿にもひるむことなく、和尚は龍にむかって仏・法・僧の三宝に帰依（きえ）する戒（かい）を授け、仏門に入ったことを証する血脈（けちみやく）を与えた。

翌日、人の姿となって再び訪れた雌龍は、梅山和尚に感謝し、お礼に自分の出来ることが何かないかと尋ねた。

「別にこれといって欲しいものはないが、この寺は昔から水の便が悪い。できようことなら、ここに泉を……。」

それはおやすい御用でございます。寺の境内（けいだい）お好きなところをお掘りください。人間の肌のような木の根にぶつかりますから、そこを鋤（すき）でおおこしなされれば、水が吹きだして泉となりましょう。そう言うともまた、今度は梅の実を二つ差し出し、暇（いとま）を告げて立ち去った。

後日、夫の龍の死骸（しがい）に重なるようにして雌龍の死んでいるのを、池のふちで村人が見つけた。龍女ののこした梅の実はやがて芽をだし、一本は紅梅、もうひとつは白梅の花を咲かせて、多年見る者の目を楽しませてくれたという。

200年の後、紅梅は天明3年（1783年）の夏に枯れてしまい、ときの住職・愚遊和尚（ぐゆうおしょう）がその木を以って（もって）観音像を2体彫りあげ、かの2龍を丁重に追善供養（ついぜんくよう）した。この小さな観音像は今なお信光寺に保管安置されている。